

■ 舟道の発見

毎年、水質調査時に、五百川峡谷の岩盤の所々に切り目が入っているのを不思議に思っていた。白鷹町菖蒲から上郷ダムまでGPS調査をした結果、人工的に掘削した舟道であることが分かった。目測だが左沢まで30kmに渡り同じような工事が成されている。これは、元禄時代の米沢藩御用商人の西村久左衛門が開削した遺構であり、国内最長の舟道といえる。

■ 腑に落ちない工期

西村が米沢藩に開削普請の願い状を出したのは元禄5年(1692)。翌6年(1693)の正月に幕府から許可が下り、6月に工事着工し、翌7年(1694)の9月には完成している。そしてすぐに、米沢藩の藩米1万3,700俵を長井市の宮から下している。しかし、30kmに渡る大工事をたった1年3ヵ月位で出来るわけがない。私も腑に落ちなかった。

■ 舟道開削の本当の歴史(私見)

それはやはり表向きであったことが分かった。西村は、左沢の大庄屋海野家に「船は通れるようになったので、船頭の差配や舟屋敷を建てる土地の確保などをお任せしたい」旨を願った手紙を出している。それが幕府から許可が下りる1年前の元禄5年(1692)の正月のこと。これにより大部分の工事はすでに終わり、舟は通れるようになっていたことがうかがえる。

西村は、京都から当時の舟道開削専門のゼネコン“角倉一門”の間兵衛(まへえ)という優秀な技術者を呼び寄せているが、それは舟道が開通した元禄7年(1694)のおよそ10年も前になる。すぐに開削工事の可否を調査させたのだらう。

そして、貞享4年(1687)。51歳の三代目西村久左衛門が引退している。その若さで引退したのはなぜか。おそらく工事が可能ということになり、御用商人の家業は息子に任せ、本人はいよいよ本格的に開削工事に取り組みはじめたことを意味しているのではないかな。

翌年の元禄元年には、大石田から舟大工を移住させている。これも開通する5〜6年も前のこと。工事の為の船作りを始めたのではないかな。



佐藤 五郎(さとう・ごろう)氏

プロフィール

山形大学教育学部卒業後、一九六九年米沢中央高等学校教諭、副校長を務める。最上川水系の水質調査を同校科学部で指導され、平成五年からは毎年ゴムボートで流下しながら水質や河川環境の調査を実施。現在は、国土交通省最上川水系流域委員会委員、山形県環境アドバイザーなどの各種委員をかねている。

著書に『母なる川・最上川』(山形県生涯学習人材機構、共著)など多数。

おそらく、米沢藩の内諾のもと、藩自身も内々にかかわり領外の代官にも根回しをし、下流の左沢から上流に向かい工事を徐々に進めていたのだと思われる。そして、最上流部の黒滝を残し、ほぼ完成の状態に近づいたところで、開削普請願いを出したのではないかな。黒滝だけの開削なら1年3ヵ月で充分やれただらう。

工事は、平らな所を新たに掘るのではなく、所々にある自然の浸食による深みをうまく繋げるようにした。浅いへりや蛇行して出っ張っている岩盤を砕いてまっすぐにしていった。砕くには、長さが1m位、太さが10cm位、重さは50kg位の先が尖った鉄のかたまりを4〜5mの高さのやぐらから落とした。これは、計算すると水中の岩も砕ける破壊力がある。

工事費は、1万7,000両かかったとある。米で換算すると現在の20億円前後とされているが、当時の日当は1人米1〜2升程度。現在の日当1万〜1万5,000円とかで計算すれば200億とか300億円の額になる。30km区間の大工事も充分可能だったとかなずける。



■ 期待される古文書調査

朝日町・左沢間は、元禄5年あたりには工事は終わり、船の往来はあったと思われる。左沢はすでに船着き場の最上流地点だったが、朝日町区間は船着き場としての町並みが充実しはじめた頃と言える。かかわる資料が残っていないだらうか。その視点でもう一度古文書等を調べ直して欲しい。

平成20年7月16日

取材/朝日町エコミュージアム協会 安藤竜二